

論文

描かれた関東大震災

— 絵巻・版画・素描 —

北原糸子

KITAHARA Itoko

はじめに

関東大震災の惨状は多くの人々にさまざまな形で衝撃を与えた。画家は被災地を巡り、その衝撃を絵画として結実させた。ここに取り上げる作品群はそのわずかな例に過ぎない。これまでもカメラによって捉えられた被害の惨状は多く紹介されているが、画家によって描かれたもののうち公の目に触れる機会が得られたものは限られている⁽¹⁾。ここでは萱原白洞による絵巻3巻、震災後直ぐに頒布された版画集、池田遙邨による素描などを取り上げ、関東大震災を描く画家たちがこの震災をどのように受け止めようとしたのか、それらの作品群は当時の社会にどのように受け止められたのかなどを考えることにしたい。予めお断りしておきたいことは、筆者は美術史の専門家ではないので、美術史的観点からこれらの絵画を扱うものではなく、あくまでも描かれた関東大震災で伝えられる震災像とはどのようなものであったのかを問うことを主眼としている点である。あるいは、美術品としての扱い方に大きな誤りを犯していることもあり得る。ご教示いただくことを願うばかりである。

1-1. 萱原白洞作「東都大震災過眼録」全3巻

まず、この絵巻を取り上げるに至った理由を簡単に説明しておきたい。この画家の作品にわたしたち（非文字資料研究センター関東大震災研究グループの田中傑、高野宏康、北原糸子）が出会ったのは、東京都慰霊堂（震災記念堂）の資料収蔵庫に当てられている塔の3階であった。2008年ここに収蔵されている資料類の調査について東京都建設局公園課の許可を得て、紙類の資料に限定して調査を開始した（収蔵庫には焼けた食器類、真鍮、鉄製品などの生活用具類などの多数の震災の被災物も保管されている）。そのなかに黄丘作「東都大震災過眼録」第3巻なる絵巻があった。震災の情景を多くの被災者群像で描くこの絵巻にわたしたちは感嘆した。しかし、黄丘なる人物が誰なのか、いつこの絵巻が震災記念堂に保管されたのか、あるいは寄贈されたのかについては皆目情報はなかった。そこで、佐倉の国立歴史民俗博物館で関東大震災の常設展示を手掛けた旧知の新井勝紘氏に問い合わせた結果、国立歴史民俗博物館には同一人物の手になると思われる画帖「関東大震災」が所蔵されていることが判明した。これは2000年に展示参考資料として購入されたものである。また、新井勝紘氏からの情報によって、白洞作「東都大震災過眼録」なる絵巻が大阪人権博物館で展示され、学芸員仲間恵子氏による論文も発表されていることを知った⁽²⁾。仲間氏の最初の白洞紹介論文は、絵巻の末尾に記された「東都大震災過眼録 大正十三年三月中旬 白洞生写 於上総土気 郷天真草舎」の上総



図1 「東都大震災過眼録」 第1巻 (40.4×1410 cm), 地震発生直後, 人々が家から逃げ出す様子



図2 「東都大震災過眼録」 第2巻 (40.4×1510 cm), 永代橋は東西両詰から人々が押し寄せ, やがて火が付き, 焼け落ちて, 多くの人々も川に落下した.



図3 「東都大震災過眼録」 第3巻 (40.4×1230 cm), 火災も収まった9月3日以降罹災して家を失った人々はそれぞれ逃げる途中で別れた親・子・兄弟を木片や紙片に名前を書いて探し求めた.

とけ
土気という地名だけを便りに白洞なる人物を探求し、漸くそのご家族にお会いするまでのスリルに満ちた苦勞が語られている。この論文に導かれて、作者萱原黄丘とは白洞の後の雅号であること、本名萱原竹尾（1896～1951）、千江夫人が千葉にご存命であることも知り、萱原家の方々（白洞氏長女の萱原礼子氏、礼子氏の長女健子氏）と直接接することができた。萱原家のご厚意で、萱原白洞作「東都大震災過眼録」全3巻を直接眼にすることができたのである。なお、仲間氏の論文では「東都大震災過眼録」を「関東大震災絵巻」と読み替えて紹介されている。

以上の過程で、現在、「東都大震災過眼録」に関連する絵巻は以下の6巻が確認されている。

- (1) 萱原家蔵「東都大震災過眼録」第1巻（「東都大震災過眼録 卷一白洞写之」）
- 「東都大震災過眼録」第2巻（「東都大震災過眼録 卷二白洞写之」）

- 「東都大震災過眼録」第3巻（「大正十二年九月一日 東都大震災過眼録 卷三 同年十二月写之 白洞」）
- (2) 個人蔵「東都大震災過眼録」大阪人権博物館 1997年展示（「東都大震災過眼録 大正十三年三月中旬 白洞生写 於上総土気 郷天真草舎」）
- (3) 東京都慰霊堂保管「東都大震災過眼録」第3巻（東都大震災過眼録 卷三 六合齋士黄丘山人写 於吾妻台下 郷天真草舎）
- (4) 国立歴史民俗博物館蔵「東都大震災過眼録」1帖（仮題，外題，内題とも記銘なし，折本で，22枚からなる画帖，以下では歴博蔵と略称する）

以上の4件6巻の刊記から，震災の年の暮れに全3巻の絵巻を仕上げ，翌1924年3月中旬に至って，(2)の1巻のみを千葉の土気で仕上げ，時期は不明だが，(3)の慰霊堂保管第3巻を吾妻台下で仕上げたことが判るが，当時震災記念堂にこの絵巻の第1，2巻が同時に寄贈されていたのかどうかは現在不明である．後に考察するように，震災記念堂には第3巻のみが寄贈された可能性が高い．歴博蔵の画帖は，絵画の切り取り方から推して，上記(2)，(3)より後に作成されたものではないかと推定される．

さて，ここでは関東大震災はどのように描かれているのかを検討する．

震災発生の1923年12月に完成させた全3巻の絵巻がそれ以降の三作品の原本と目されることから，まず，萱原家蔵全3巻の内容をみておきたい．この作品は白洞の長女礼子氏によれば，師山口多門の50周忌に萱原家に返却されたものだということであり，この間は師のところに保管されたままであったということである．

第1巻は地震発生，第2巻はこの間に起きた悲劇的トピックス，第3巻はさらに続く混乱と終息へ向かう様子，そして被服廠での供養で巻を閉じる．時間的経過を踏まえ，その過程で発生した事件を折り込んだ物語が語られる構成である．

第1巻は，大地震発生（9月1日）で人々が避難する様子を描く．震災当時，第1次大戦後の軽佻浮薄な世相を糺すものとして，地震を天の諫めとする天譴論が唱えられた．作者白洞もまず仏神の怒りとして震災絵巻を描き起こす．憤怒の不動明王が射る火矢は避難する人々の牽く大八車の荷や布団に取り付き，燃え上がる．また，眷属も火の付いた輪宝を投げつけ，それらは雲に乗って地上に落ち，地震で倒れた家屋や樹木に振り落とされる．人々は逃げる．焰は勢いを増し，やがて火災旋風によって人々は空中に舞い上がり，そして地に打ち付けられる．まさに天変地変の大災害の始まりの様相を伝えて最初の巻は終わる（口絵1，2参照）．

続く第2巻の当初も，仏神の怒りは収まらず，三面六臂の明王は輪宝を天下に投げて，人々の回心を迫る様子で始まる．永代橋は橋の両詰，つまり，浅草側からの渡ろうとする人と，本所・深川から西へ逃げようとする人々が橋の上で鈴なりとなり，火の付いた橋桁とともに橋上の人々は川中へ落とされた．この悲劇は地震発生から遅くとも4時間後に起きていると考えられる．隅田川には焰を逃れて飛び込む人々も多かったが，川の水も燃え盛る焰で熱くなり，逃げ場を失った人々が川の中で命を落とした．人々の家々も地震で崩れ，火が廻り，焼け崩れた．出動した警官が瓦礫の下になった人々の救出活動を行うが，命を落とした人々の灰色に塗られた身体があちこちに散乱した様子が描かれ

る。戒厳令は2日発令された。これによって5万人という規模の軍隊が全国から東京、横浜に続々集結を始める。第1師団第1聯隊のテント張りの詰所が描かれる。うどんの看板を出す焼トタンの小屋、焼け爛れた煉瓦の壁が描かれて第2巻は幕を閉じる（口絵3参照）。第3巻は穏やかな聖観音像ではじまる。もはや神の怒りも鎮まり、やがて訪れる災後の瞬時の平穏を予測させるが、実は悲劇も描かれる。避難途中で別れ別れになった親子、兄弟は、名前を書いた板切れなどを掲げて街々を探し回る。目敏い小商人は西瓜や酒を売りはじめる。一方、町々に設けられた自警団、あるいは消防団の法被を着て、槍や刀、御用提灯を掲げた男たちが流言に躍らされて朝鮮人を捕らえ、彼らを後ろ手に縛り上げる様子が描かれている。場面は展開して、やがて、学校も再開され落ち着きを取り戻し、悲劇の被服廠跡では四十九日の法会が営まれるところで3巻が幕を閉じる（口絵4参照）。

この全3巻は恐らく震災発生から後50日ほどの期間を中心に、時間的経緯に即しながらも、必ずしも時系列に描かれてはいないが、口々に説かれた事件や震災風景が罹災した庶民の動きを中心に描かれたものである。特徴的なことは、三越など呉服店からデパートへ変身を遂げつつあった銀座周辺、あるいは丸の内の警視庁、東京會館、あるいは中央省庁などの巨大な建造物の崩壊、焼失は永代橋の崩落を除いてはほとんど登場しない。画題の中心はあくまでも圧倒的多数の罹災民である。それも個々の顔は目、鼻、口が細い筆で書き込まれただけの個性を打ち消した群集として描かれていることである。これほどに被災群集という存在を中心に描いた震災画は他に例を見ないといえる。

1-2. 作者萱原白洞について

さて、ここで、作者萱原白洞、すなわち黄丘について、先行研究が明らかにしたところを紹介しておきたい。

すでに述べたように仲間恵子氏による白洞の調査によって明らかになった点は以下の通りである。

萱原白洞（かやはら はくどう）、香川県綾歌郡生まれ、1896年2月18日生まれ、小学校教員を経て20歳で上京、日本画家山内多門（1877～1932）に師事、1923年の震災当時、東京市淀橋町柏木に居住、自らも罹災したとされる。罹災後身を寄せた千葉の土気時代は白洞を号し、1929年結婚後は黄丘と号した。白洞は中央画壇に属さず、南画、日本画をものし、金銭などに無欲で豪放磊落、酒を愛し、幅広い交際を持った人物と紹介されている⁽³⁾。

なお、その後、白洞の出身地香川県在住の歴史家石井雍大氏が克明に白洞の履歴を追っている。それによれば、生地は綾歌郡山田村大字東分3番戸、萱原伝五郎、母クニの次男として出生。小学校教員をしていたという事実はないと石井氏は調査から結論付けている。上京は1916年9月26日、竹尾20歳であった。落ち着いた先は豊多摩郡淀橋町大字柏木896番地、川合玉堂の門下であった山内多門に師事した⁽⁴⁾。

1-3. 「東都大震災過眼録」大阪人権博物館 1997年展示、個人蔵

（「東都大震災過眼録 大正十三年三月中旬 白洞生写 於上総土気 郷天真草舎」）

この作品については、阪神大震災で古本市場に登場し、震災2年後の1997年1月17日から2週間、大阪リパティホールで特別公開されたという曰く因縁がある。再度、仲間氏の論考によって、この間の事情を窺うことにしたい。

1995年の震災時に神戸で罹災した民家から出たもので、1996年11月末、日本玩具史研究家多田敏捷氏によって発見された資料だということである。

この絵巻は(1)の萱原家蔵の全3巻が描かれた関東大震災の年に描かれたものより少なくとも3ヶ月を経て千葉県で書かれたものであることが末尾の記銘によって判明している。この巻は萱原家蔵の第3巻にあたる震災直後の混乱期を経た後の落ち着きを取り戻した罹災民の様子を中心に描かれているが、仲間氏、石井氏、それに新井氏が注目した自警団による朝鮮人捕縛の様子が描かれていることで大きな話題を呼んだ描写が加わる。この部分については絵巻の範囲を区切って(日本刀を持って左へ向かう人から「社会奉仕」の食料配給所から右に向かう人々まで)、仲間氏が詳細に分析されている。それによれば、登場人物は140人、服装は黒い法被、水色の法被を着た消防団が81人、日常着(和服)が54人、白い制服を着た巡査が4人、チョゴリを着た人が2人。このうち、武器に相当するものを持っている者は日本刀の消防団17人と和服姿3人、鳶口の消防団13人と和服姿4人、竹槍・棍棒の消防団21人と和服10人、サーベルの巡査が3人と分析している。倒れている人(負傷者か死者)と死体は23人、消防団9人と和服姿14人で、武器を持った人に襲われている人は、消防団法被姿1人と和服姿5人と数えている。後ろ手に縛られて連れて行かれる人は、消防団の法被を着た2人とチョゴリを着た2人と分析された(図4参照)。

カウントされた人数などに異論はないが、法被を着ている人々がすべて消防団員ではないと思われる。この時期、人々は勤め先の商店などの名入りの法被を着る、あるいは半纏を着る職人などいわば社会的立場を表す一種の制服でもあったわけだから、法被を着ている人々が消防団員とは限らない。それに消防団員が消防団員に打擲されるというのもこの場面では理屈に合わないのではないかと思う。

チョゴリを着た男女2人がなぜ後ろ手を縛られて引っ張られるのかということから、朝鮮人虐殺の問題へ論文が展開されていく。仲間氏は、白洞の絵巻には朝鮮人の虐殺現場そのものが描かれているわけではないが、明らかにそこに導かれる状態を描くものとして、他の作家も描くことを避けた場面を描いた歴史の証言として高い評価を与えている。

では、(1)の萱原家蔵の第3巻に描かれた自警団の場面と比較してみよう(鳶口を持ち左方向へ向



図4 「東都大震災過眼録」 第3巻 (1997年大阪人権博物館展示)



図5 「東都大震災過眼録」 第3巻 (萱原家蔵)